

NPO法人



2014年 9月10日
第23号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

もくじ

コリンとわたくし。犬と人間 ☆JSRC理事長 新美治一（名古屋経済大学名誉教授）	2
採録 縄文柴犬についての質問集！ ☆質問疑問について 中間報告	3
シバの散歩道(23) ☆JSRC理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)	4
交流会報告	
こんな交流もありです！ 少人数ながら・・・贅沢な雰囲気で行われました ☆岩手県 佐々木俊幸	8
交流会を振り返って ☆群馬県 栗原明美	8
交流会に寄せられた愛犬のしおりから・・・	10
おたよりコーナー	
タオの娘心 ☆愛知県 西谷智子	14
縄文柴犬交流会旅のつれづれに ☆大分県 石井 勲	14
春の散歩 ☆石川県 黒梅 明	16
「良子」の近況 No.15 ☆富山県 竹内誠一	18
「投げたモノを見つけ出すまで」 ☆和歌山県 和田 修	18
子供たちと ☆和歌山県 土山仁美	20
JSRCのメーリングリストでの談話を紹介します。	21
お知らせ 「野生生物と社会」学会が発行するWildlife Forum春夏号に、研究団体として紹介されました。	23
事務所報告 ☆新入会 ☆会費 ☆寄付金 ☆仔犬登録	24
JSRCの理事でもあります藤井忠志氏の「日本のクマゲラ」11月刊行 ご案内	裏表紙・表



みなさまの周辺の方々で、縄文柴仔犬の飼い主をご紹介ください。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

コリンとわたくし。犬と人間

NPO法人縄文柴犬研究センター 理事長 新美 治一

名古屋経済大学名誉教授(元 名古屋経済大学大学院法学研究科教授)

犬の肉体は強靱である。その感覚は、鋭い。野生の本能に由来するものか、主人と犬との日常的な交流関係に由来するものか、あるいは、その他になにか要因があるのか、小生には、分からない。敢えて言えば、複合的な要素がその「強靱さ」・「鋭さ」の源であろう。

6 月半ばのことである。

散歩する河原の藪のなかには、いろいろの動物が息する。この頃は、キジの繁殖時期。突然、コリンの前方にオスのキジが走りはじめた。キジの家族を守る所作である。コリンが追いかける。コリンの必死の追及にもかかわらず、キジは、時々、飛び立ち距離を保つ。追いつけない。キジが藪の中に消えた。コリンはあとを追いかける。見ると、キジは、飛び立ち、向こう岸に渡ってしまった。ここまでは、コリンもまだまだ、子どもだな、と気軽に考えていた。

ところが、5分たっても、10分たっても藪からコリンが姿を現さない。いつもであれば、口笛を吹けば、すっ飛んでくるコリンだ。河原の藪をかき分け流れの見える所までいって、河原と水の流れている川とは、水面から高さ3mほどの擁壁で「分離」されていることに初めて気づいたのである。そして、コリンは、追いかけるのに夢中で、キジに向かって「ジャンプ」し、河原から川に転落したのではないか、と思いはじめたのである。

藪は濃密で、川岸まで行くことができない。「落ちたコリン」を確認することもできない。川の反対側からみれば、川の転落した側を見ることはできるであろうが、向こう岸に渡るにも、橋がない。仮に、川のなかに「いる」ことが判明しても、はしごがない限り、川に下りることはできない。

小生は、なかば、「どうしようもない」と諦め、河原の散歩道で座ってコリンの帰りを待つことにした。イヌを介しての知人の偶然の散歩を期待する。しかし、来ない。イライラ待つこと、2時間くらいたった頃である。ずぶ濡れの、前足を痛めて、はるか遠くから近づいてくるコリンを見つけた。目を疑った。口笛を吹くと、3本足で懸命にかけてくる。小生もかけた。

足を痛めながらも、川岸にあがることが可能な場所を必死に探したのである。岡にあがって、主人の「居る」と信じた場所に、懸命にかけてきたのである。

コリン:栗駒の真夕-くりこま・2013.9.5生

(剣の太郎×倫の真夕)



犬の強靱さ・運動能力・知覚能力。主人の所へと行かなければ、というけなげな行動に感動した。

人工的なことは何もしなかったのに、1週間ほどして、再び、小生が全速力で舗装道路を自転車で走っても、ついてくるほどに、完治した。

7月初旬のことである。コリンを散歩させながら、小生の家から約2 km離れたスーパーに買い物に出かけた。こうしたコリンとの散歩は、初めてのことであった。店の雑踏には関係のない、裏庭に繫留した。10分程度で買い物を済ませ、戻ってみるとコリンがいない。太さ8 mmの、綿の固い紐が食いちぎられていた。犬の主人は、パニックである。店の入口に戻ってみる。近辺を当てもなく、探してみる。

コリンは、散歩の時以外、紐などで繫留されることがなかった。散歩のときでも、河原に出れば、紐がなくなり、自由の身で走り回る犬であった。店の裏庭に繫留された時、自由を奪われたことに不安を感じたのか、外出の時、よほどのことがない限り、主人と20~30m以上は離れたことがないのにどうなってしまったのか、主人に置いてきぼりにされた、ともかく主人の所へ行かなくてはと思ったのか、小生には、分からない。ともかくいなくなったのである。

警察に届ける、「動物愛護センター」に連絡する、保健所をお願いする、町内放送で紐の色、犬の特徴、「逃げた場所」など、何度も、ながしてもらう。必死の探索にもかかわらず、2日経っても、行方は分から

なかった。諦めかけていた。

3日目の夜中、わが家の入口で、犬の鳴き声がある。吠えるというのではなく、文字通り<クークー>である。最初に気づいたのは、女房である。「コリンが帰ってきたのかもしれない」。そんなはずがない。「そら耳」ではないか、と自分の淡い期待を戒める。高ぶる期待を抑えきれない。呼び声は、まさにコリンのものである。ベッドから転げ落ち、足をくじきそうになり、入口に急ぐ。まぎれもなく、コリンがそこにいた。抱きしめてやる。水を掌にのせて、飲ませる。コリンが顔や手、足を舐める。再会だ！

身体はまったく汚れていない、朝になると餌をいつものように食す。散歩に出かける。逃げた以前と全く同様なコースを走り回っていた。信じられない。

犬は主人の匂いを忘れない、主人との信頼関係は極めて強固だ、という。それにつけても、犬の強靱な身体能力と動物的本能に脱帽！そして、乾杯！

(2014. 07. 29)

コリンと散歩の筆者



シバの散歩道 (23)

根深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)



早春の岩木山

わが家のシバは、この7月の誕生日で十歳になる。生後三ヶ月でケージに入れられ、わが家に来たときは、どことなく寂しそうだった。四匹いた兄弟姉妹の一匹として離れ離れになったのだから心細かったのだろう。耳もまだ、いまのように立っていなかったし、体もちいさかった。生家の主人が言うには、三日間ほどは啼くかもしれないとのことだったが、シバはそういうこともなかった。

たぶん、と私は推測したのだが、シバが啼かなかったのは、それ以前から私と面識があったからではなかったか。シバの生家の主人と私は溪流釣りを話題に酒を酌み交わす昵懇の間柄だったので、私はちょくちょく遊びに行くたびに、生まれてまもないころからのシバを知っていた。

シバの生家は弘前城跡の亀甲門(北門)前にある、三百年あまり続く由緒ある旧家で国の重要文化財に指定されている。シバの「古城獅子号」という犬号も生家の立地条件に由来する。すなわち古城は弘前城を指す。

シバを飼いはじめて以来、私の日々の過ごし方に変化が生じた。なにしろ毎日、朝夕の散歩、食事をつくる係りとしての責任はまっとうしなければならない。考えてみると、石場さんとの友情のしがらみで、私がシバを貰い受けたのだから、ことの成り行きからして飼育係は私でなければならなかった。石場さんは昨年(2013年)75歳で亡くなった。早すぎる。

私が留守のときはやむをえないが、それ以外はすべてシバの飼育については私が世話をしている。深酒して二日酔いで散歩に行かない、とか、何かの会合で午後から飲みはじめて酩酊し、深夜の帰宅、あるいは午前様などということで夕方の散歩に行かない、という

ことが許されないのであり、私はシバを飼うようになってから以前にくらべて外で痛飲することがほとんどなくなった。私がいなくなると不安になり焦っているシバを想像するのだ。私が帰宅すると吠えながら体当たりしてくる。「こらーっ、どこへ行ってたんだ。このやろう、どうしてくれるんだ。こんちくしょう、ワンワン」と言うことなのだろう。

雨が降ろうが雪が降ろうが、そのときどきで散歩コースは変更しても、散歩は私に義務づけられているのだった。散歩中、私はシバに話しかけることが少なくない。それは私が一方的に話しかけるわけで、シバが私の言葉を理解できるかどうかは気にしていない。

「シバ、今日は天気がいいな。岩木山がよく見えるな」「さあ、ここのベンチに腰を下ろして一休みしよう」「そろそろ家へ帰るか」「あっ、ノスリがカラスに追い駆られているぞ」「やや、カラスの死骸があるぞ」といった調子である。

以前、シバは私が留守にすると下痢をすることがあった。そのかわり私がいると相当に甘えてわがままいっばいで、家人が言うには、威張っている。私が家にいるときといないのでは立ち居振る舞いがまるで異なるのである。

シバは日中、庭で過ごしている。庭には小屋があるので、そこに入ったりしているが、夜は、ネコが通りかかったりすると吠え立てて近所迷惑になることがあってはいけなくて家で入れ、玄関の廊下にカーペットと座布団を敷いて、その上に寝るようにしている。ふすま一枚へだてて私の部屋なので、深夜、シバは尿意を催すとか細い声を出し、私に合図をくれる。私はすぐさま起きて庭に連れ出すのだが、その動作がまた

マーキングと異なり、長いのだ。片足を立てて一分間ほど続けるので、厳寒の冬は衣服を着込んで出て行かねばならない。夏はパンツ一枚で出て行くこともある。

※ ※ ※

この十年、散歩を続けていて気づいたことがあった。それは図らずも、自分が路上観察者になっている、ということだった。散歩中に四季折々、雲の形や動き、風の肌触りや空の色、光の加減などさまざまな自然現象はもちろんのこと、人々の表情、木々や草花や農作物の生育状態、はては自らの体調を含めた森羅万象の変化に注意を払うようになった。

早春の晴れた日、白鳥やガンが編隊を組んで北へ渡っていく光景は地球規模で書き出されたダイナミックな生命のリズムである。わずか小一時間の散歩の間に、ガンの群れは一隊だったが、白鳥は五隊が啼きながらつぎつぎと遙か上空を飛んでいった。日を受けて純白に輝くその姿は崇高であった。

何と壮大な営みだろうかと感動しながら、ポケッ↑

トに忍ばせていたデジカメで、ダメだろうと思いつつシャッターを何度も押した。心の片隅に期待の一念があったのだが、しかし案の定、ダメだった。鑑賞に値するようなものではなかった、というより、ゴミが付着した程度にしか写ってはいなかった。

「生きとし生けるもの」は生命のリズムにしたがってさまざまな軌跡を描いているのだろうが、しからば人はどんな軌跡を描いているのだろうか。そしてまた私自身はどんな軌跡を描きつつあるのか、それとも何も描いてはいないのか、といった想念が散歩中に私の裡をよぎったりするのである。

何だか現実離れした途方もない夢に浸っているようでもあるが、そうでないとすれば、いったい他の散歩者は何を見て何を感じているのだろうかと思うことがある。

他人の心境は知る由もないが、私の場合、路上観察者として、ときおりメモがわりにデジカメでさまざまな目につく出来事を撮影する。近ごろ、鳥の死骸がよく目につく。



伝書バトの死骸



ノゴマの死骸



カラスの死骸

去年(2013年)の秋に写真に撮ったものを列記すればノゴマ、カラス、伝書バト。放置するわけにもいかないので、そのつど市役所に電話で連絡しているのだが、伝書バトについては足環に記されていた飼主の連絡先に電話した。その伝書バトは何者かに食い殺されて胸部から上部がなくなっていた。ネコかカラスの仕業ではないかと思われる。

中学のころ、私は伝書バトを飼育し、大人に混じっ

てレースに参加していたので、そのときの経験から、自分の愛鳩を失った飼主の気持を案じて連絡したのだった。飼主は市内の住人だったので死骸のある場所を連絡した。早速回収したと見えて、夕方の散歩のときは死骸がなかった。死骸の伝書バトは、飼主が電話で話していたが、幼鳥だった。朝の訓練中、アクシデントに遭ったのだろう。

死骸を見て思ったのだが、そこは畑だったから、訓

練の飛行中に舞い降りたところをネコに襲われたのかもしれない。伝書バトが飛行中に地面に下りることはもっとも危険なことであり、レースを念頭に飼育したハトであれば絶対にやってはいけないことだった。レースの途中でそんなことをしていれば勝てないので、道草などしないように不断の訓練で仕込むのである。

中学の私は日本伝書鳩協会津軽支部に所属し、年に二回春と秋のレースに参加していた。屋根に上がって、いまかいまかと愛鳩の帰巢を待ち望んでいた当時の私はそれはそれは一途だった。百キ、二百キ、三百キ、四百キ、六百キレースが組まれていた。入賞したこともある。おそらく秋田との県境の山中でハヤブサに襲われたと思うのだが、片翼のつけ根を鮮血に染めて瀕死の重傷を負いながら帰巢したのもいた。私は涙を流し、手当てした。たしか六百キレースの直前だったが、優勝を狙っていた期待の愛鳩が、鳩舎に侵入したネコによって食い殺されたこともあった。私は怒り狂い、ネコに灯油をかけ火をつけ、橋の上から川に放り捨てた。

当時、私の愛鳩はレース用が十羽前後だったが、すべて「津軽系」という小ぶりの体型をしたハトで占められていた。津軽海峡をはじめ越えたという伝書バトの子孫であり、鳩舎はレース用と繁殖用を分けて使っていた。

私が伝書バトから足を洗ったのは高校に進んで山に狂ったからだった。興味の対象が伝書バトのレースから登山に移行したのである。高校から大学に進学するにつれ、登山の対象はヒマラヤへと向かった。

※ ※ ※

四月もなかばを過ぎると、何よりほっとするのは近隣住民による雪かき騒音から解放されるからだ。登校

する小学生もどことなくはつらつとして挨拶の声にも張りがでてくる。全員ではないが、挨拶しないのは大人で、全体に陰鬱である。雪が消えると中・高校生が自転車で通学するようになる。

私が住む住宅地のちかくに弘前高校の野球部の練習グラウンドがあり、「サイクリングロード」と呼ばれている、川沿いの遊歩道を集団で練習に向かう生徒の挨拶はさすがに運動選手らしく切れがいい。野球部の練習グラウンドに隣接してゴルフの練習場があるのだが、厄介なことに打球がネットを飛び越えて危険なのである。

この連載でも述べたことだが、犬猫看板同様、いっこうに改善の兆しはいまのところ見られない。犬猫看板にゴルフの打球、雪かき騒音、決して望ましい生活環境ではないのだが、行政も含めて住民は三猿主義に徹している。

雪が消えて春になると歩きやすくなるので散歩の距離も延びる。さて、久しぶりに久渡寺方面へ足を延ばすか、という期待感も膨らんでくる。途中でゴルフの練習場があるのだが、様子を窺いながら足を延ばしてみると、ネットを飛び越えた打球が、川岸に萌え出たフキノトウの斜面に散乱し、打球の音が聞こえてくる。サイクリングロードわきの田んぼにもあいかわらず、ゴルフの打球がめり込んでいるのは、かなりの強力な勢いをつけてネットを飛び越えてくるからだろう。犬猫看板もそうだが、私としては見て見ぬふりはできない体質であり、市議員を介して議会にとり上げてもらったりした。ところが、それでも行政は「知らぬ顔の半兵衛」を決め込むので、ゴルフの練習場を営んでいる会社の社長に直接電話で改善するよう訴えたことがある。が、全然ラチが明かかなかった。黙殺だった。こうなるとどうすればいいのだろうか、手の打ちようがない。



遊歩道のわきにもゴルフの打球



田んぼにめり込んだゴルフの打球

ゴルフの練習場を過ぎると弘前高校野球部の練習場で、こちらの方向にはゴルフの打球は飛んではこない。以前は飛ばしていたのだが、野球部の生徒が練習中にゴルフの打球を受けて負傷し、学校側が抗議して以来、打球が反対方向へ飛ぶように変更され現在の状態になったのである。しかし、これは危険が改善されたわけではなかった。南の方向へ飛んでいた打球が北の方向へ変更されただけだった。

私としては、さて、このような腐り切った地域社会にどう対処すべきか、というのが、シバの散歩を開始して以来のテーマになっている。それには市議会や行政の内部、たぶん癒着構造がベッタリはりついているのではないかと勝手な想像をするのだが、自分自身でその状態を探検したいと考えている。「知行合一」、これが私のモットーだから、いずれ実践せざるを得ないのだと思う。

※ ※ ※

春の嵐が去って、青空が朝から光り輝いていた日の午後、サイクリングロードが延びる土淵川の上流へ散歩に出かけた。冷たい風が吹き渡り、弘前高校の野球の練習場では練習試合が行なわれていた。バックネット裏に設けられている観覧席で、腰を下ろして観戦したのだが、10点以上の大差で弘前高校が負けていた。対戦相手は青森市の東奥学園高校。

「ずいぶん大差がありますね。どうしたのでしょうか」と傍に立っていたユニホーム姿の関係者にそれとなく聞くと、ピッチャーの出来がよくないのだという。岩木山が早春の西空にくっきりとスカイラインを描き、選手の気合いを入れる掛け声が澄み渡った空気を切り裂いていた。

弘前高校の野球練習場から先へ散歩に行くのは去年の九月、台風18号で土淵川が氾濫し、サイクリングロードの路面や道端の柵が損壊していたのを確認して以来だから七ヶ月ぶりということになる。ゴルフの打球がネットを越えて飛んでくるような危険な散歩コースはどうしても敬遠されがちになる。

散歩中に知ったのだが、去年の災害で損壊した柵の大半がいまだに補修されていないのだった。一部は補修されているが、いったいいつになったら補修工事を

庭で昼寝するシバ



再開し、元通りに直すのだろうか。

澄明な陽射しが燦然と輝き、サイクリングロードをジョギングする中年男女の姿が疎らに見られた。こんにちは、と声をかけると、男より女のほうが愛想がいい。ジョギングするのに口紅をつけたり顔面にもけっこう化粧を施している。そんなものなのだろうか、どうも感覚的にピンとこないナ、と思いながら、どこまで行くんですか、どこから来たんですか、と訊ねると、答える声が乱れていないのは、きっと走りなれているからである。呼吸を乱していない。

「たいしたもんですね」と思わず感嘆した。きっと美容にはいいだろうと思った。

ノスリのつがいが甲高い啼き声を上げて風に乗って飛んでいる。リンゴ畑の向こうの雑木林の上空でホバリングしているのは付近に巣でもあるのだろうか。雪の消えたばかりの田んぼをカワラヒワがピリピリ啼きながら群れをなして飛んでいった。

双眼鏡を持ってくればよかったと思ったのは、そのカワラヒワの群れが近くに繁っているニセアカシヤの木の梢にいっせいに止まったからである。せっかくの観察の機会を逸して残念に思った。日々、些細なことの積み重ねは大切である。もし双眼鏡でカワラヒワの群れを観察することができれば、その姿態が印象深く記憶に刻まれ、より一層親しみが増したのではないだろうか。

このときの散歩で、空を切る音を放って、ゴルフの打球が私の傍を飛んでいき、雪が消えて間もない田んぼにめり込んだ。シバが田んぼにめり込んだその打球に鼻を近づけて正体を探ろうとしていた。